

## 竹取物語（たけとりものがたり）

平安前期の物語。1巻。別称《竹取の翁(おきな)》《かぐや姫の物語》《竹取翁物語》。作者不詳。成立時期は諸説があるが、9世紀後半から10世紀の初め、《古今集》成立以前とみられる。現存本はその後多少の改補がある。

〔あらすじ〕 昔、竹取の翁という者が竹の中から見つけ出して育てた3寸ばかりの小さな女の子は、3月ほどで輝くばかりの美女となった。その後、翁は黄金(こがね)の入った竹を見つけることが重なり、翁の家は豊かになった。なよ竹のかぐや姫と名付けられた娘の、その美しさに求婚する者も多く、とくに熱心な5人の貴公子に姫はそれぞれ難題を課し、その解決を結婚の条件にしたが、結局、5人とも失敗する。最後には帝の求婚もしりぞけた姫は、十五夜の晩、迎えに来た天人たちとともに、みずからのくにである月の世界へと昇ってゆく。そののち、姫に去られ傷心の帝は、姫が形見に置いて行った不死の薬ももはや不要だとして、それを天に最も近い駿河国の山で燃やすよう命じる。たくさんの土(つわもの)が命を受けて登り、薬を燃やしたので、その山を富士(不死と、多くの土に掛ける)と名づけ、その煙は今も山頂に立ちのぼっていると伝えられる。

〔構成〕 竹の中から子どもを発見し、諸種の経過をへて、その子が昇天するという伝奇的な古型の「かたりごと」竹取説話を土台にして、(1)かぐや姫の生いたち(化生説話、致富長者説話)、(2)貴族たちの求婚(求婚難題説話)、(3)帝の行幸(相聞説話)、(4)姫の昇天(羽衣・昇天説話、貴種流離説話)、(5)富士の煙(地名起源説話)というような構成である。それは先行かたりごととの諸種の話型をとり入れ、伝統的な、人々になじみの深い外衣を活用しつつ、平安王朝社会の上流貴族たちの俗悪腐敗の実態を風刺、滑稽、ユーモアの筆致で批判的に語り、伝奇性(浪漫性)と現実性とを巧みな虚構性によって統一して描き、それに作者の鋭い批判性を含め、現実社会の真実表現としての新しい機能をもった物語文学というジャンルを創造したものであった。それゆえ、《源氏物語》の絵合(えあわせ)巻では、《竹取物語》を物語のいでき初めの祖(おや)とのべている。《竹取物語》は、単に世態小説として真正面から貴族社会の実態を描こうとしたものではなく、民俗的な伝承形式を活用して広い読者層になじみの深い親近性をもたせつつ、笑いの中に社会批判をこめ、貴族社会の内情を描き出している点で、日本における風刺小説の先駆ともいえる。だが、この作品は貴族社会の俗悪性暴露にのみ主題を置いたものではなく、そのような社会においても、なお、かぐや姫と翁、嫗、あるいは帝と姫とのあいだに流れる人間的な愛情の美しさを描き出して見せている。とくに昇天の段などでは、俗悪な社会においても、なおそれに侵されない、清く美しいものの存在を象徴し、読者の前に清純にして永遠なるものへの志向を提示している。《竹取物語》を現実社会の矛盾を暴露して見せた風刺文学とのみ見るのは一面的であり、また、かぐや姫の昇天に象徴されるような浪漫的文学とのみ見るのも一面的で、まさに「をかし」と「あはれ」の世界の、みごとな統一的作品である。

〔作者について〕 このような世界を描き出して見せた作者は、現実の貴族社会の俗悪面に矛盾を感じつつも、なお人間世界での清純なものにあこがれた人で、和・漢・仏教等の教養ゆたかな男性であったようである。作者については、従来、源順(したごう)、源融(とおる)、僧正遍昭、齋部(いんべ)氏の一族などの諸説があるが、確証はない。《竹取物語》は、上述したごとく、対照的な要素を、伝統的な形態の中に創造的な契機をふくめて、巧みに描き出した物語で、たわいなく、おもしろく、美しく、深みのある作品である。

南波 浩 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

## 物語文学（ものがたりぶんがく）

日本文学史の用語。あらゆる民族，あらゆる時代がそれぞれ物語をもつ。神話や叙事詩や昔話や小説，これらはみな物語にぞくする。劇も物語をふくむ。そして近ごろはその機能や構造を分析しようとする 物語学(ナラトロジー) までとなえられており，この気運は今後さらに高まってゆく可能性がある。ここにいう物語文学も，こうした広い意味での物語の一つの特殊な形態と考えていい。物語の出で来はじめの祖（《源氏物語》）なる《竹取物語》以下，平安中期から鎌倉時代にかけて作られ，おもに貴族の間でもはやされた物語冊子の類を，日本文学史ではとくに物語文学と呼ぶ。《今昔物語集》や《平家物語》などは，物語の名がついているけれど，ふつう物語文学のなかには入れず，それぞれ説話文学，戦記文学または軍記(物語)という例になっている。斉一性を欠くことになるが，文学ジャンルの名称や区分は地方性をまぬかれがたい節があるからやむをえない。とにかく物語の方が上位の概念であり，したがって物語＝物語文学とするこれまでの方式は事態を不当に単純化しすぎていることになる(あえて西欧語に移せば物語は narrative に，物語文学は romance に近いというべきか)。

この物語文学については，次のような特質を指摘できよう。まず，それが文字で書かれた最初の物語であった点である。《竹取物語》が口誦の素材を下地にしつつそれを読みものに変形し構成しているのは，だからすこぶる象徴的な意味をもつ。むろん文字といっても仮名文字のことにほかならない。物語文学の成立には，民族文字としてのこの仮名文字の発明とそのある程度の普及とが絶対の要件とされたはずである。第2のいちじるしい特質は，女がそのおもな読者であった点である。物語と云ひて女の御心をやるもの也（《三宝絵詞》）とあるとおり，当時の物語はもっぱら女のための文芸であった。女が小説の読者として果たしている役は今なお大きいけれど，その圧倒的多数が女だというのはやはり特異な現象というほかない。女たちは部屋のなかでのつれづれを慰めるため，物語に読みふけることが多かったようである。物語の主題がたいてい恋にかかわっているのも，このことと無縁であるまい。こうした一般的特質を共有しながらも，物語文学には二つの異なる流れが存した。一つは《竹取物語》のように虚構を旨とした作り物語の流れ，他は《伊勢物語》のように歌を種とした歌物語の流れである。さらに，自己の経験に即した《蜻蛉(かげろう)日記》のごとき日記文学(これもまた物語の一種と呼びうる)の存したことも見落とせない。これらのものを総合して物語文学に新たな次元を拓いた傑作が《源氏物語》である。神話このかたの物語のほとんどすべての要素が，そこには見事に再組織されて生きているとって過言でない。爾後，物語文学の命脈がとみに硬直し衰弱してゆくのも，《源氏物語》がこの文学形式の可能性をほぼ耀みつくしたためではないかと思われる。

西郷 信綱 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.